

九州方言における「カリ活用」の現況

住 田 幾 子

はじめに

九州方言上には、形容詞の「ハヤカ(早い)」、形容動詞の「リッパカ(立派だ)」など、終止形が「カ」で言いさられる、いわゆる「カ語尾」形容語が存立している。この特異な方言形「カ語尾」が、なぜ、九州方言に成立するに至ったのか。「カ語尾」の存立を考究することは、九州方言の特質の一つを解明する手がかりとなるう。

「カ語尾」成立の母体には、「カリ活用」の隆盛が考えられる。九州方言上、「カリ活用」は、各活用形ともに、今日、盛んにおこなわれている。「カリ活用」の現況を見ると、終止形・連体形の「カ語尾」が存立している地域と、「カリ活用」の未来形、連用形、仮定形などが日常一般的でありながらも、終止形・連体形の存立していない地域とがある。

「カ語尾」の分布は、九州の西半一帯をおおっている。(注1)
その内部状況については、

(1) 形容詞・形容動詞ともにカ語尾の存する地域

九州方言における「カリ活用」の現況

(2) 形容詞のカ語尾が存する地域

(3) ヨカ(よい)・ナカ(ない)の二語のみが存する地域

(4) ヨカのみが存する地域

に、大きく分類することができる。

いっぽう、終止形・連体形以外の「カリ活用」の各活用形の分布領域は、西半域はもとより東半域をもおおう九州一円にわたる。

「カリ活用」を温存する九州方言にあつて、その終止形・連体形の存立如何は、九州の西部と東部との方言事情の差異を示すものとなる。

それにしても、なぜ、また、どのような状態で九州方言に「カリ活用」が温存されているのか、ということも問題となる。「カ語尾」考察のための基礎作業としても、「カリ活用」の現況を把握することは必要であろう。ここから、一歩ずつ「カ語尾」の本質に迫っていくかと思ふ。

本稿では、「カ語尾」保有域での「カリ活用」の現況と、「カ語尾」を保有していない地域での「カリ活用」の現況とを報告しつつ、幾つかの問題点をとり出してみたい。

一 「カ語尾」を有する「カリ活用」

「カリ活用」方式の中であつて、「カ語尾」形となるのは、終止形と連体形とであり、両者は両形である。この終止形・連体形を保有するか否かが、九州方言上での「カリ活用」の地域差ともなる。

まず、形容詞・形容動詞ともに「カ語尾」終止形の「カリ活用」を見ることにする。いわゆる「カ語尾」専用地域では、形容詞はもとより、助動詞「たい(希望)」、「らしい(推定)」、形容動詞などが「カリ活用」方式をとる。ここでは、有明海に面した佐賀県鹿島市での「カリ活用」の様相に焦点をあてる。(注2)各活用形の方言上の生きざまをとらえるためにも、文表現例を多く掲げてみたい。

終止形・連体形

形容詞が述部となり、文末に立つ例では、

○コリヤ クサカ。(青女)

それは、臭いこと。

○ヨソバシカ。ハヨ コギヤンタ ステンシャイ。(中女)

きたないこと。早くこのようなのは捨てなさい。

などがある。共通語訳に「くこと」と言い添えたく思われる、詠嘆的表現となる。形容動詞の用例、

○ワー、キレーカー。(青女)

わあ、綺麗なこと。

でも、同様の表現である。助動詞の用例、

○イキタカー。(青女)

行きたいなあ。

にも、「行きたくてたまらない。」という強い気持ちを感じとられる。

○アソコン オンセンナ ホンニ キモチン ヨカラシカ。

(老女)

あその温泉はほんとうに気持ちがいらいしい。

は、同じく助動詞「らしい」の用例であるが、副詞「ホンニ」と呼応した強調表現である。終止形で文をくくる表現を見ると、一種の感動文をしたてる要素が、「カリ活用」の終止形には認められるようである。

○アンター コスカ ナー。(中女)

あんたはこすいわね。

のように、「ナー」などの文末詞が続く表現も多く聞かれる。このほか、助詞が接続する場合には、

○アンタガ ハヤカギー チョット マットツテ ネー。(青女)

あんたが早ければ、ちよつと待つてね。

○カンタンカケン スグ シーユー モン。(青女)

簡単だからすぐにできるもの。

○ソガン オイガ ワルカバシンゴト イワイナ。(中男)

そんなに俺が悪くでもあるかのように言いなざるな。

○アマカバツテン コイバ ヒトツ タバテ クンシャイ。(中女)

甘いけど、これをつつ食べてください。

○キレーカテバツカイ ユーテ オセーシノ ウマサー。(青女)

綺麗だとはかり言つて、お世辞のうまいこと。

○リコーカカ ドギャンヤロ カ、キーテ ミューカ。(青女)

利巧だかどうかだろうか、聞いてみようか。

○ハクジョーカニモ ホドノ アツ ネー。(青女)

薄情にもほどがあるねえ。

などがある。助動詞が接続する例では、

○キヨーカーゴタツ タイネ。(青女)

器用なようだね。

○コイワ イロノ シロカデス モンネー。(中男)

これは色が白いですものねえ。

○シズカカナイバ ソコニ イエバ タチューー カネ。(中女)

静かならばそこに家を建てようかね。

○ケチカナイドン オイニワ クンジャッタ モン。(老女)

けちだけれど、私にはくださったもの。

などが得られた。特異な形容動詞の用例を主としてとりあげているが、形容詞も形容動詞も同様の状況で、「カ語尾」が自在に、共通語形「イ語尾」に匹敵する働きをしている。

体言に続く用法は、

○ワツカ モンナ ナーモ シゴザレン。(老女)

若い者はなににもなさらない。(しようとはしない。)

○リップカ イエニ ナシンサッタ ナター。(中女)

立派な家になさったねえ。

○キレーカトバ ツメンシヤイ。(中女)

綺麗なのをつめなさい。

九州方言における「カリ活用」の現況

などである。

以上、終止形と連体形とは、同形の「カ語尾」である。当地方言では、形容詞とそれに準ずる活用をする助動詞も、あるいは形容動詞も、終止形・連体形は、一様に「カ語尾」形となっている。

未然形・未来形

否定の助動詞が続く時は、

○オナゴワ ヤサシカランバ イカン。(中男)

女は優しくないといけない。

○ソギャン キノドクカラージデン ヨカトサ。(老女)

そんなに気の毒に思わなくてもいいのにさ。

などと、その活用形は「カラ」となる。

また、未来形は、

○ネーチャンワ キレーカローガ。(中女)

姉ちゃんは綺麗だろうが。(妹はそれほどではないけれど……)

と、「カロー」である。

連用形

連用形の一つに、「カイ」がある。「カイ」は、「カリ」の変化形であるが、

○キレーカイオッタケン ネー。(青女)

綺麗だったからねえ。

○ヨーキテクイオンジャッタケン ジューカイオッタ モンネ

い。(青女)

よく来てくださったから自由に思っていた(重宝して

いた)ものねえ。

などと、過去を回想する表現において聞かれる。動詞「オル(居る)」「の過去形が続く「カイオッタ」は、慣用的な用法となっている。

「カイ」はまた、

○ソガン センデン ヨカイソーナ モン バッテン。(中男)

そんなにしなくてもよきそうなものだけだ。

と、助動詞「ソーナ(そうだ)」「(ソニー)」「(ソニー)」が接続する場合にも活用する。しかし、「カイソーナ」、「カイソニー」は、形容詞「よい」には続いているが、他の形容詞、形容動詞に続く例が聞かれない。

いま一つの連用形は、「カッ」である。

○テンスーノ ヨカッテ ゴーカクシタ。(中男)

点数がよくて合格した。

○アン ヒタ キレーカッテ ハヨ オヨメニ イキンシャツタ。(青女)

あの人は綺麗で早くお嫁にいかれた。

など、助詞「テ(て)」が接続する。「テモ(ても)」も続き、

○ヌツカッテモ ヒヤカッテモ アシタワ チヤント キテイ

カンバ イカン。(中男)

暖かくても寒くても明日はちゃんと着ていかないといけない。

の用例がある。過去形の「カッタ」は、さかんにおこなわれている。

○ジーチャンナ ツヨカッタ モンノー。(老女)

爺ちゃん(体が)強かったものねえ。

など、形容詞の「カッタ」は共通語にもよく見られるが、当地方言では、

○ガンジューカッタ モンネー。ナガイキ シナイタ。(老女)

頑丈だったものねえ。長生きなされた。

と、形容動詞も「ガンジューカッタ」と活用する。

已然形

「カイドン(かれども)」と、助詞「ドン(ども)」が接続した已然形「カイ」がおこなわれている。

○ワツカイドン シツカイ シトイナツ。(中女)

若いけれどもしっかりしていらしゃる。

○ピンブーカイドン タフットワ タベオッタ。(中女)

貧乏だけれど食べるのは食べていた。

などがその用例である。「カイ」は、「カレ」の変化形である。

以上が、鹿島市での「カリ活用」の現況である。当地での「カリ活用」を一覧表にすると、つぎのようになる。

未然形	連用形	終止形・連体形	已然形
カラ	カイ	カ	カイ
カロー	カッ		

当地方言では、形容詞も形容動詞も区別なく「カリ活用」がおこな

わかれており、未然形、未来形、連用形、終止形・連体形、已然形の各活用形を具備して、「カリ活用」発展の極みの状況を呈している。

九州の肥筑・薩隅の方言域においては、「カリ活用」の発展過程を示すさまざまな様相が見受けられる。形容詞・形容動詞ともに「カ語尾」専用地域である鹿児島市に次ぐ様相を見せるのが、形容詞の「カ語尾」専用地域である。薩摩半島南端に位置する鹿児島県揖宿郡山川町岡兒ヶ水の形容詞の活用方式は、「九州方言の基礎的研究」(九州方言学会編 風間書房 昭和44年5月)によると、つぎのとおりである。

例	語幹	①未然	②仮定	④未来	⑤連用	⑥連用	⑦終止	⑧連体
黒い	クロ	ーガラ	ーガレ	ーガロ	ーガイ	ーガッ	ーガ	ーガ
うれい	ウレツ	ーカラ	ーカレ	ーカロ	ーカイ	ーカッ	ーカ	ーカ
		(ーカヤ)						

当地方言では、形容詞一般にこの活用表が該当する。鹿児島市と同様、各活用形を具備している。しかし、形容動詞でも、わずかの語が終止形・連体形の「カ語尾」だけを有することと、

ニガ(新しい) キガ(黄色い) ヒカ(悲しい) ハデガ(派手だ) デミガ(地味だ) キノドツカ(気の毒だ)

などの例が掲げられている。当方言に、形容動詞の「カ語尾」化傾向が認められ、「カ語尾」進展過程の一樣相を見ることができ。

九州方言における「カリ活用」の現況

「カリ活用」が形容動詞へ進展する際には、まず第一に、終止形・連体形がおこなわれるようである。当地での形容動詞の「カ語尾」化はさらに進展することが予想されるが、鹿児島市の状況から判断すると、いずれは、終止形・連体形から他の活用形へ進行することも考えられよう。

さて、形容詞において「カ語尾」と「イ語尾」とが併用される現象も、「カ語尾」化の過程の一つとしてとらえられる。いわゆる「カ語尾」「イ語尾」併用地域である。「方言学講座 第四卷」(東条操監修 東京堂 昭和36年)には、「鹿児島・宮崎南部」の形容詞について、

薩隅方言の中ではカ語尾・イ語尾の両型を併用する地域が大部分を占める。たとえば鹿児島市では両型が五分五分に聞かれる。いずれかと言えばカ語尾は女性に多く、イ語尾型は男性に多い。がしかし、鹿児島湾をはさんで大隅半島ではイ語尾が、薩摩半島の端ではカ語尾が多用される。

とある。また、「方言生活の実態」(松田正義 明治書院 昭和35年)には、「熊本県阿蘇郡阿蘇町内牧」では、老人は「イ語尾」であるが、中学生から若い人にかけては「カ語尾」を使用する旨の記述も見える。形容詞の「カ語尾」化が、女性あるいは若年層に起こりがちのものであることを示唆している。が、こういった地域での「カリ活用」の全容を調査し得ていないので、状況把握は今後に期待したい。その際、どのような形容詞から「カ語尾」が使用されるのか、語彙的な調査も必要とならう。

「カ語尾」の最も淡い状態を見せるのが、形容詞全般に「イ語尾」

のおこなわれる中に、「ヨカ」のみが聞かれる地域である。いわゆる「ヨカ」地域である。これもまた、「カ語尾」存立の一つの特徴的な現象を示している。たとえば、福岡県浮羽郡吉井町での形容詞は「イ語尾」であるが、「ヨカ」が、年層、男女の区別なく自然会話に聞かれる。(注2) 当地の「よい」は、「エー」が通常であるが、「ヨカ」が、「よいことば」との意識をもって使用されている。丁寧なものを用いる時は、

○ヨカデス モンノ。(老女)

いいですものねえ。

○ヨカ コトバ ツカイナサルケ。(老女)

いいことばを使われるから。

などと、「ヨカ」が聞かれる。「デス(丁寧)」、「ナサル(尊敬)」、などの助動詞と呼応した表現に「ヨカ」があらわれている。

○ヨカ。ヨカ。ヨカ。ヨカ。ヨカ。(老男)

(心配しなくても) いい。いい。いい。いい。いい。

は、ゲートボール試合中での友人の失敗に対して、いたわりの意のこめられた発言である。相手に物を勧める時は、

○ヨカツオ トランノ。(老男)

いいのをとらないかい。

となり、依頼文では、

○ヨカナラ ツイテ キテー。(少女)

よければついて来てよ。

となる。相手の物を勧める表現にも、

○ソン フク ヨカー。(少女)

その服、とてもいいこと。

○ヨカ クルマー。(少男)

いい車だなあ。

○エライ ヨカ イエ タテチョルヨ。(老男)

なんとい家建てているよ。

などと、「ヨカ」が使われる。「ヨカー」、「クルマー」などの文末の長呼、上昇音調、あるいは副詞「エライ」と「ヨカ」との呼応する表現などから、これらは、一種の感動文と思われる。親しい者同志でも、あいさつことばでは、

○キョーワ エライ ヨカ テンキネー。(中女)

きょうは、とてもいい天気ねえ。

などと、「ヨカ」が見られる。総じて、当地での「ヨカ」は、相手の心情に強く訴えかける時に使われるものようである。福岡県下での「カ語尾」「イ語尾」併用については、吉町義雄氏が、「九州のコトハ」(双文社 昭和51年)で、

カイ並用地域ではカは感嘆、感動を表すパトスの表現であり、

イは平静普通な状態のエートスの表現である。

と述べていられる。浮羽郡吉井町での「ヨカ」は、たしかに感動文に顕著に見え、「エー」は、平叙文に使われている。「カ語尾」に、感情的な表現性が認められよう。

「ヨカ」と「ナカ(ない)」との二語が対応するように「イ語尾」域に生きるのも、「カ語尾」存立の特徴的な現象の一つである。いわゆる「ヨカ・ナカ」地域で、形容詞全般は「イ語尾」であるのに、「よい・ない」の二語のみ、「カ語尾」「イ語尾」が併用され

ているのである。神部宏泰氏は、「九州西部方言の形容語——カ語尾形容詞を中心に——」（『國語教育研究』第26号 昭和55年）で、「ヨカ・ナカ」の生命力に触れ、「よい・ない」の「辞的な性格」の強さ、「日常の言語生活にあつての、この二語の、高い出現頻度」などの要因を指摘されている。が、現時点では、「ヨカ・ナカ」地域での詳しい状況はつかめていない。ともあれ、「ヨカ」「ナカ」は、「カ語尾」の本質を端的に示す語ではないかと思われる。

ひとまず、終止形・連体形の存立に注目して、「カリ活用」方式の把握に努めたところ、必然的に、九州西部方言上の「カリ活用」を見ることとなった。ともかく、終止形・連体形の「カ語尾」は、九州方言上の「カリ活用」に生起し、特有の表現性をもって、九州西部方言の地域共通語としての地位を確立しているようだ。しかも、「カ語尾」は、現在もなお、「イ語尾」域に徐々に進展しつつある。が、その範囲は、おのずから、地域の方言事情によって画定されるものであろう。「カ語尾」を保有、あるいは受容し得る地域全体を「カ語尾」圏と考え、そこに九州西部方言の存在を認めることができるのではなからうか。

これまで、幾度も、「カリ活用」の終止形・連体形を「カ語尾」と呼んできた。が、地域によって他の語形も存立している。先掲の「九州方言基礎的研究」に、岡見ケ水方言について、

「カ」語尾といっても、「クロガ」（黒い）のように、多くのものは「ガ」語尾であり、たとえば「ニツカ」（憎い）のようにQか/J/S/Nなど特殊音の後のみが「カ」語尾になる。また、ほんの一部に、「シクッ」（しぶい）「エックッ」（えぐい）

九州方言における「カリ活用」の現況

「ケツパ」（けむい）「ネツパ」（ねむい）のような「クッ」「パ」語尾のものもある。

とある。「カ」形のほかに、「ガ」「クッ」「パ」などの語形もある。また、「昭和60年度 川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する報告書」（熊本県球磨郡五木村）では、

老年層のことには、「ハヤカル。モンデステ ナー。」（早いものですからねえ。）のように、連体形に「ル」の脱落してない古い形を聞くこともある。

との報告がなされている。「ル」は無声化し、幾分聞こえが弱くなっているようであるが、終止形・連体形「カル」の存立を知ることができる。「カ」形が、広域にわたり分布するのは、その語形式が、最も合理的で、人々に受容されやすいからであろう。

二 「カ語尾」を有しない「カリ活用」

終止形・連体形を有していない「カリ活用」について見ていこう。まず、北九州市若松区での「カリ活用」を例にとりあげる。当地は、九州最北端に位置し、西部方言域の筑前に属する。とはいえ、東部方言域の豊前との境界に近く、九州東部方言にも通じている。当方言での「カリ活用」は、つぎのとおりである。（注2）

未然形	連用形	仮定形	命令形
未来形			
カラ	カリ	カリヤ・カラ	カレ
カロー	カッ		

未然形の「カラ」は、

○アシデモ ハヤカラナ トリエガ ナイ。(中女)

足でも速くないととりえがない。

などと、否定表現に見られる。この用法は、鹿島市と同様である。

未然形「カラ」は、九州西部方言に特有のものと思われる。未来形は、

○ソラ イツテミタカロー。(中女)

それは行ってみたいだろう。

のように、「カロー」である。

連用形の「カリ」は、助動詞「そうだ」が続く場合に活用し、

○コッチノンガ オーカリソーナ ネー。(中女)

こっちのほうが多そうだねえ。

○ニオクエンモ モットツテ モーケンデモ ヨカリソニー。

(中男)

二億円も持っていて(これ以上) 儲けなくてもよさそうな

ものを。

などが聞かれる。「カッ」は、

○ケツカガ ヨカッテ アンシンシタ。(中女)

(検査の)結果がよくて安心した。

○オカネガ ナカッテモ カウンヤケ。(老女)

お金がなくても買うのだから。

○マー コラ イタカトル ヨ。(中女)

まあ、これは(この傷では) 痛かったはずだよ。

などと、助詞「テ」が接続する。「イタカトル」の「トル」は、

「て居る」である。また、過去形の「カッタ」も、

○モー サムカッタチ ヨー。(中女)

(信州は) もう寒かったつてよ。

○キブンガ ワルカッタラ ヤスミナナイ。(老女)

気分が悪ければ休みなさい。

などと、盛んにおこなわれている。

仮定形は、「カリヤ」「カラ」である。

○ソイデ ヨカリヤ エー タイ。(老女)

それでよければいいさ。

○イタカラ ビョーイン イカナ タイ。(中女)

痛ければ病院に行かないとき。

などの用例がある。「カレば」が「カリヤ」となり、さらに「カラ」となっている。

命令形の「カレ」には、

○ヨカレト オモーテ シタ コトヤケ エーヤ ナイ ネ。ダ

レガ ワルカレチャ オモー モンカ。(中女)

「よかれ」と思ってしまったことだからいいではないの。誰か

「悪かれ」とは思うものか。

の例があるが、他の活用形とは異なる特殊な用法と言えるものである。

昭和60年8月の調査では、以上述べたところの活用形、あるいは

文表現を聞き得たのであるが、昭和35年時においては、現段階と状

況が異なっているようである。岡野信子氏が「島郷生活語における

形容詞——その構成と表現——」(『研究紀要 第10集』 若松高

等学校郷土研究会 昭和35年)で、同じく北九州市若松区(當時は、福岡県若松市)の形容詞について詳細な調査結果を発表されているが、その中に、

ヨカ トコ ションナスケ ナー。老女↓中女 あの方は会社
のかなり上の地位におられるからね。

と、「ヨカ」が見受けられるのである。この「ヨカ」については、「ごく稀に『ヨカ』(良い)」だけが用いられるとのことである。二十五年後の今日、「ヨカ」を聞くことはない。連用形の「カリ」についても、かつては、

クジョーガ オーカリヨッタ。老男↓調 あ頃は不平不満の
文句が多かったものだった。(岡野氏の同論文より)

と、「カリヨッタ(カリ居った)」という回想の慣用表現が聞かれたようであるが、今日では、この用法も聞き得ない。「ヨカ」「カリヨッタ」の消滅は、西部方言末端域での「カリ活用」の衰退を示すものであろう。

九州東部方言に属する、豊前域、大分県宇佐市での「カリ活用」は、

未来形 カロー
連用形 カリ(ヨカリソーナ)

仮定形 カリヤ
カッ(〜カッチ・〜カッチョロー・〜カッタ)

である。(注2)豊後域、大分県直入郡直入町長湯での「カリ活用」は、「九州方言基礎的研究」に、

カロー(推) カリヤ(仮) カッタ(過去) カリソー

九州方言における「カリ活用」の現況

(推)

の活用形が示されている。宇佐市、直入町では、共通して、未来形「カロー」、連用形「カリ」「カッ」、仮定形「カリヤ(〜)」「」が見える。九州東部方言域での「カリ活用」方式は、ほぼ、この二地と同様の状況と推察される。未然形・終止形・連体形は有していないものの、九州東部方言域にあっても、「カリ活用」は、根づよくおこなわれているのである。

おわりに

以上のように、「カリ活用」が九州全域で盛んにおこなわれていることは明らかである。九州方言が「カリ活用」を温存するのは、「カリ活用」に内在する状態動詞「ある」の盛行によるものと考えられる。この「ある」は、九州方言上、比況・様態の助動詞「ゴタル(ごと・ある)」をも生起させ、やはり、九州全域にわたる分布を見せている。

しかし、「カリ活用」は、終止形・連体形の「カ語尾」、未然形の「カラ」を保有する九州西部方言により盛んである。とりわけ、「カ語尾」は、九州西部方言の特異性をきわだたせるものである。なぜ、九州西部方言に「カ語尾」が存立するのであろうか。神部宏泰氏は、「九州西部方言の形容語——カ語尾形容詞を中心に——」において、

体言性の基質が根底にあって醸成される、特殊な土壌に育まれてカ語尾形容詞も、安定した展開をとげることができたかと想察されるのである。

と、九州西部方言の「体言化傾向」を指摘されている。この問題は、「カ語尾」と他の九州西部方言特有の語とを比較検討することによって、いっそう明らかになっていくことであろう。

九州東部方言の「カリ活用」が、西部方言に比べて簡単なのは、東部方言の共通語化が西部方言のそれよりも早いということが一つの理由ではあろう。

九州方言研究上、「カ語尾」は、さまざまな課題をなげかけているが、いずれにしても、その母体となる「カリ活用」の本質を見きわめることが肝要であろう。そのためには、文献上の「カリ活用」も見合わせなければならないと考えている。

注 1

九州全域の「カ語尾」の分布を把握するために、次の言語地図を参照した。

- ① 「九州語用言活用分布相要領並補遺」所収の「形容詞カイ語尾地域別図」(吉町義雄「国語学」第八輯 昭和27年)
- ② 「日本語地図」所収の形容詞・形容動詞に関する地図(国立国語研究所 昭和41年)
- ③ 「九州方言の基礎的研究」所収の「「好い」の地図」(前掲)

注 2 臨地調査

調査地名	調査年月	被調査者
佐賀県鹿島市高津原	昭和55年3月	老女 69才 中女 49才 青女 24才
福岡県浮羽郡吉井町	昭和60年4月	老男 72才 老女 69才 中女 37才 少女 16才 少男 11才
北九州市若松区栄盛川町	昭和60年8月	老女 71才 中女 37才 中男 33才
大分県宇佐市中原	昭和60年8月	老女 78才 中男 49才 青女 24才